チベット族の木地製作

――雲南省香格里拉県を事例として――

田畑久夫

問題の所在

木製の椀や盆（丸盆、木地盆と称される）などに代表される、日常生活に用いられる各種の容器類を中心に製作することを木地製作という。かかる木地製作の最大の特徴は、製品の製作工程においてロクロ[1]と称される木地製作独特の工具を使用することである。ロクロを使用した木地製作は、北海道を除く日本各地において広範囲にわたり実施されてきた。日本列島の一部である北海道において木地製作が行なわれなかったのは、木地製作に用いる広葉樹の原木が針葉樹の卓越する、冷帯という気候条件からほとんど存在しないこと、また先住民であるアイヌには木地製品を製作する技術を有しなかったことによると推察される[2]。

木地製作を伝統的に生業としてきた工人は木地屋あるいは木地師と呼ばれている。木地製作は、上述したようにロクロの使用にみられる如く、特殊なしかも高度な技術を必要とする。そのため多くの場合、技術は親から子へと継承された。また木地製品の製作技術の拡散を防止する目的で、木地屋同士つまり同職の者が結婚した[3]。その結果、わが国では木地屋が同姓を名乗ることが多かった。このような特色を有する木地屋は、原木周辺の山中に家屋を構えて独立して生業を営んでいたが、後に集落（木地屋集落）を形成するようになった。販売などの流通面で有利となったためである。わが国における木地製作および木地屋集落に関しては多くの研究業績の蓄積が認められる（例えば、杉本１９６７、橋本１９７９、田畑２００２など）。

しかしながら、これまでブータン王国や中華人民共和国南部など、照葉樹林帯と称される日本列島とほぼ同一条件

を有する海外において、木地製作の存在が認められていた（中尾１９７１、中尾２００４：１４９―１５０など）が、筆者らの研究（田畑・金丸１９８９、田畑２００２：２６３―２９８など）を除いて、海外における木地製作および木地屋集落に関しての調査・研究は等閑視されてきた。かかる理由は、木地屋を最初に科学的な立場から論じたのが、日本における民俗学の祖とされる柳田國男[4]（柳田１９１１）であったことからも推察されるように、木地製作を生業とする木地屋は日本独特に発生し、その後展開したものであろうと看做したからであった。また海外においても、近年日本同様陶器製の碗が食器具として普及しだした。その結果、各地にあった木地製作を専業とする工人によって形成された木地屋集落も、周辺の集落同様、農業を営む農村へと転換していった。そのため、木地製作者つまり木地屋および木地屋集落が皆無に近い状態となったことなども指摘できる[5]。

以上論じたように、わが国と同様海外においても、長い伝統を有する木地製作は衰退あるいは廃止される傾向がみられる[6]。しかしチベット族居住地区に関しては、かかる事実が多少異なっている。すなわち、チベット族の主食であるツァンパ（麦こがし）を保存するための大型の鉢（わが国の木地鉢に相当、ザンバーホーと称す）や、ツァンパをこねるため各自が携帯している食器などに木地製品の利用が存在するからである[7]。とりわけ椀に関しては、各自が使用する食器（椀）を携帯することを習慣としているため、重くてこわれやすい陶器製の碗は好まれず、普及していない。

本稿では、現在でもほとんどのチベット族が使用している椀や鉢などを製作する木地製作に関して、フィールドサーヴェイから得られた資料などを多用して、論を進めていくことにする。かかる点は、民族学（文化人類学）や地理学の多くの研究者が行なう、海外におけるフィールドサーヴェイに基づく研究とはいささか異なるような印象を与えることになる。というのは、民族学（文化人類学）や地理学などの研究者が実施しているフィールドサーヴェイに基づく研究は、そのフィールドサーヴェイで入手した資料を主体に分析・検討することで、論を展開していくという特徴が認められるからである[8]。この点に関して、中国におけるフィールドサーヴェイは事情が異なっている。すなわち中国は、漢字を発明したことからも明白な如く、文献史料の非常に豊富な国である。それ故、固有の文字を所有しなかった少

数民族についても、漢籍史料には多くの言及がみられる。したがって、中国のフィールドサーヴェイに基づく研究では文献史料の存在が無視できないのである。この点に関して、中国の少数民族を研究対象とする、フィールドサーヴェイに基づく海外の研究者は、一部の研究者を除外すれば漢籍史料をほとんど利用していないという傾向が顕著にみられる。本稿では、かかる点を克服する意味からも、フィールドサーヴェイで入手した資料と共に漢籍史料を出来るだけ参照することにした。[9]

一、チベット族およびその周辺民族の概略

チベット族は、言語系統を主体とした民族の区分によれば、漢・チベット語族に所属する民族集団である。その他中国には、タジク族やオロス族が属するインド・ヨーロッパ語族、満州族やモンゴル族などに代表されるアルタイ語族をはじめ、オーストロアジア語族やオーストロネシア語族に各々所属する民族集団も多くないがみられる。その中でも漢・チベット語族に分類される民族集団は、中国に分布・居住する五五の少数民族[10]の中で三一民族と最多を占めている。このように、非常に多くの少数民族が居住するため、四つの語群に細分されている。すなわち、漢民族や回族が属する漢語族、チベット族を筆頭に一六の少数民族が所属するチベット・ビルマ語群、ミャオ族を代表とするミャオ・ヤオ語群[11]、およびチワン族やトン族などのカム・タイ[12]語群の四系統に細分される。

チベット族はチベット語を話す。チベット語の特徴は単音節語で、声調をもつ。この点は中国語（漢語）と同様であるが、語順は中国語（漢語）と異なり、主語―客語―述語、被限定語＋限定語という型をとる（村松１９７３：１３６）。なお前者の主語―客語―述語という語順は日本語と同様である。

チベット族の主要な分布・居住地域は中国西部の一角を占めるチベット高原[13]である。チベット高原の外形は、東西二五〇〇キロメートル以上、南北の最大は一二〇〇キロメートルという東西に細長い四辺形に近い形をしている。総面積は二〇〇万平方キロメートル以上に達し、中国最大の自然地域であり、世界最高に位置する高原（平均海抜高度は四五〇〇メートル）である（任　主編１９８２、阿部・駒井抄訳１９８６：２７９など）。この高原の北端を境にして、クンルン（崑崙）山脈とチーリエン（祁連）山脈がほぼ連

続して東西に走り、東端にはホワトワン（横断）山脈、西端にはカラコルム山脈がそれぞれ走っている。また南部は世界最高峰が連なるヒマラヤ山脈で限られている。高原内の気候は、海抜高度が高いことから冷涼である。そのため、高温による水分の蒸発が少ない。短い夏季を中心に山上周辺の氷河が溶け出すと、多くの沼沢や湖沼が生じる。豊かな草原へと景観が大きく変化する（田畑他２００１：11）。

右述した草原の一部では、短期間で成育可能なハダカ大麦の一種であるチンクー（青稞）麦や、ダイコン、冬小麦、越冬ソバなど耐寒性に富む作物が栽培されている。一方その他の大部分の草原では、冷涼という気候条件から農業に適さない。そこで、これらの農業不適地においては、チベット高原のみにみられるヤク、黄牛とヤクとの雑種である犏牛、ヒツジなどの家畜の放牧が行なわれ、それが生業の中心となっている[14]（木内編１９８４：３３６―３３７）。住民の中心はチベット族に代表されるチベット系の住民である。

チベット語は、既述したようにチベット高原を中心に分布・居住しているチベット族に使用されている。それ以外にもロッパ族やトゥー族などの少数民族にも使われている。例えば、中国・インド両国の国境地帯マクマホンライン以南のインド側に居住する東部メンパ族では、総人口の80パーセントが日常的にチベット語を使用している[15]。このように、チベット語が使用される分布範囲はかなり広く、中国の総面積のおよそ五分の一を占める地域で話されている。その中でも、チベット族がチベット高原に集中して分布・居住しているのは、次のような理由からであると説明されている。すなわち、六〇二年にはじめてチベットを統一した吐蕃王国が九世紀末に滅亡した後、チベット族の大半はこの高原から出ることがなかったことに起因するという（田畑他２００１：１１３）。

右述のように、チベット族は約三百年近くの長い期間ほぼ同じ地域で居住することになった。そのため、幾つかの方言がみられることになった。これらの方言に関して、中国国内の研究者は以下の三つの方言に大きく区分している[16]（国家民委民族問題五種叢書編輯委員会《中国少数民族》編写組１９８１：２５７）。

a・ウェイツァン（衛蔵）方言

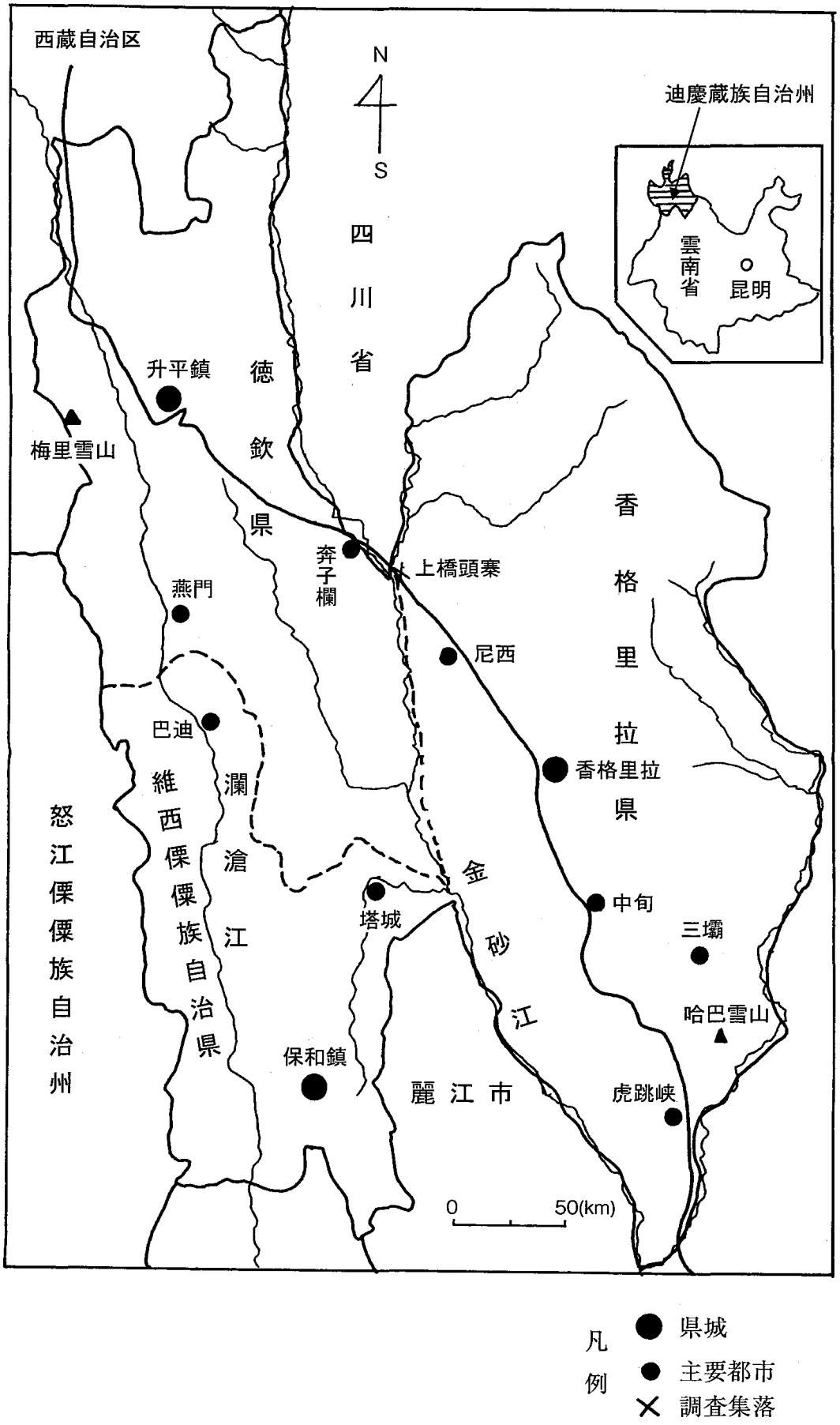
b・カム（康）方言

c・アムド（安多）方言

チベット族は、自らを「ポエ」（phφ[45]）あるいは「パ」

(pa[43]) と称している。この民族集団を現在のようにチベット族と呼ぶようになったのは、チベット族が最初に建国した統一王朝に関連している。すなわち、唐代の漢族がこの統一王朝を吐蕃と称したが、そのとき「蕃」にチベット族の自称「ポエ」を当てたとされる。吐蕃は、その後唐からシルクロードを通って西方に伝わり、唐初にシルクロード地方に勢力を有したチュルク（突厥）族が「ティビット」(Tüpüt) と称したのがヨーロッパに伝播し、「チベット」(Tibet) となったという（松村１９７３：１３８－１３９）。

このような特色を有するチベット族は、主として政治上の理由から、長らく集中した分布・居住していたチベット高原を離れ、周辺の地域に移動し、居住するものが増加している。政治上の理由とは、チベット族の集中居住地区であるチベット高原では、政府、貴族・土司および寺院の三大領主階級が土地を占有し、この階級だけで総人口の80パーセントを占める、遊牧民を含む農奴を支配していた。[17] 中華人民共和国成立後の一九五一年五月に、当時チベットを支配していたチベット仏教の活仏ダライ・ラマ政権と中国人民政府との間に、十七ヶ条からなる「平和の解放協定」が締結された。この協定により、ダライ・ラマ政権およびその政権を強力に支持する貴族、土司、寺院の領主階級は、自らの地位の保全が確保されることとひきかえに、中国人民解放軍のチベット駐留を認めた。しかし、中国人民解放軍がチベット族の農奴階級と協力して領主階級の地位を剥奪しようとしする動きがみられることを恐れて、一九五九年に領主階級のほうが反乱を起した。この反乱は、一ヶ月足らずで中国人民解放軍によって鎮圧された。反乱を起した当事者たちはダライ・ラマを擁してインドに逃亡した。このダライ・ラマと行動を共にしたのは三大領主階級に所属するほとんどの人びとであった。その結果、それ以降、チベットは民主改革が実施され、一九六五年に最初のチベット自治区人民大会が開催され、そこでチベット自治区が正式に承認・成立した。その後、中国政府の政策を嫌う住民やダライ・ラマを崇拝する集団などが政治的な離民として、チベットを脱出するようになった。脱出先は、チベット高原とほぼ自然条件の等しいチベットの周辺地域が多かった。元来これらの周辺地域にはチベット族が居住していることもあり、これらのチベット族の縁者を訪ねて移動してきた。その周辺地域のチベット族の移動先の一つが、本稿の対象地域である中国雲南省の最北端を占める迪慶蔵族自治州なのである（第１図）。


西蔵自治区
N
S
四川省
迪慶蔵族自治州
雲南省
昆明
升平鎮
徳欽県
梅里雪山
奔子欄
上橋頭寨
香格里拉県
燕門
尼西
巴迪
維西傈僳族自治県
瀾滄江
香格里拉
怒江傈僳族自治州
金砂江
中甸
塔城
三壩
哈巴雪山
保和鎮
麗江市
虎跳峡
0
50(km)
凡例
県城
主要都市
調査集落

第1図　地域概略図

迪慶蔵族自治州は雲南省唯一のの自治州[18]である。全国には甘粛省甘南蔵族自治州、青海省玉樹蔵自治州など十ヶ所の蔵族自治州が存在する。迪慶蔵族自治州は、チベット高原の東部、滇（雲南省の旧名、以下同様）、川（四川省）、蔵（蔵族自治区）の三つの省・自治区に接している。全州の総面積は約二三七〇万平方キロメートル、総人口は約三五、一万人強で、そのうち少数民族が総人口の84パーセントを占める。[19] 州内にはチベット族・リス族、ナシ族など二〇を越える民族集団が居住している。なかでもチベット族が最大で、総人口の33パーセントを占める。迪慶蔵族自治州には、二九の郷鎮、一八二の行政村があるが、三つの県すなわち香格里拉県（元中甸県、二〇〇一年改名）、維西傈僳族自治県、徳欽県の県・自治県に分かれている。なお香格里拉は、香格里拉県の県城（県人民政府所在地）でもある。現在、香格里拉までは毎日飛行機が運行されており、観光客の増加が著しい。

迪慶蔵族自治州内には、横断山脈が南北に走り、その横断山脈と平行するように、サルウィン川上流の怒江、メコン川上流の瀾滄江、長江上流の金沙江の三河川が北から南に流れ、それぞれ深い渓谷を形成している。

以上のような自然地理学的特色を有する迪慶蔵族自治州は以下に述べるように、三つの地区に大きく分類することができる（雲南省迪慶蔵族自治州地方志編纂委員会編２００３：３―４）。チベット族を筆頭に周辺地域に分布・居住する各少数民族は、地形や気候を中心とする自然地理学的な制約を多大に受け、生活を営んでいる。すなわち、これらの三つの地区は、自然地理学的な条件が異なっている。そのため、そこに生育する植物にも著しい相違がみられる。かかる相違が当地域の主要な産業である農牧業に強い影響を与えているからである。また、各地域には居住する民族集団も異なり、住み分け現象もみられる。

（1）高寒地区

この地区は海抜高度が二八〇〇～六七四〇メートルあり、非常な高所に位置している。面積は七七八五平方キロメートルで、州の総面積の32パーセントを占める。この地区の上位、すなわち海抜高度四三〇〇メートル以上では非常な寒冷地である。そのため、農業はまったく行なうことができない。下位を占める二八〇〇～四三〇〇メートルにかけての地区では、気候は寒冷であるが大半が高原状の盆地となっている。そこでは、周辺の山々から水源とする湧水が

豊富にわき出ているので、用水にも恵まれている。それ故、非常な寒冷地にもかかわらず、農業および牧畜業が盛んである。主要な農作物としてはチンクー麦、ジャガイモ、各種のカブ、小麦、ソバなどが栽培されている。これらの耕作物は寒冷という気候条件から冬期間栽培することはできないので、一年一毛作が主体となっている。なお、雲南省の他地域で多く栽培され、住民の主食とされている稲は栽培することができない。

盆地の一角や山腹斜面の到る場所では牧場が展開している。これらの牧場ではヤク、黄牛、羊などの家畜が放牧されている。また山地には、モミ（冷杉 *Abies spp.*）を代表とする高山性の針葉樹が繁茂し、林業も盛んである。その他虫草、貝母などの薬草、および松茸などのキノコ類の採取も行なわれ、貴重な現金収入となっている。住民はほとんどチベット族である。

（2）山　区

海抜高度が二二〇〇～二八〇〇メートルの地区が所属する。面積は一一、五二九平方キロメートルで、州の総面積の48・7パーセントを占める。比較的冷涼な盆地や山腹斜面と河谷が交差する地区である。温帯中部モンスーン気候に所属し、ウンナンマツ（雲南松 *Pinus yannanen sis*）、タガネゴチョウ（華山松 *Pinus armandii*）、コナラ属（櫟属 *Querus*）などの針・広葉樹林が混交している。農業が産業の中心で一年二毛ないし三毛作が基本である。主要な農作物はトウモロコシ、小麦、そら豆、ナタネであるが、地域的にはソバ、エンバク、ジャガイモ、水稲の栽培もみられる。また、家畜としての豚、黄牛、山羊の飼育も盛んである。さらに近くの山中では、キクラゲに代表されるキノコ類や各種の薬草の採取や、一部では梨、梅、板栗などの果樹の栽培も近年行なわれるようになった。住民はチベット族、リス族、イ族が中心であり、それぞれの民族集団が個別に集落を形成している。

（3）河谷地区

海抜高度一四八六～二二〇〇メートルに位置し、州の中ではもっとも低地に属する。面積四五八三平方キロメートルで、州の総面積の18・8パーセントを占める。金沙江と瀾滄江の両河川の水系が主体である。気候は大変温和で、温帯および亜熱帯モンスーンに所属している。土壌は沖積土が中心であるが、一部には熱帯特有の赤色を呈するラテライトがみられる。これらの土壌は大変肥沃で農業に最適

である。主要な農作物は、水稲、トウモロコシ、ナタネ、各種のマメ類などで、州の食料供給基地といわれている。当地区の農業の特色は、例えば、水稲とナタネというように。一年二毛作が主体となっている点である。周辺にみられる森林はウンナンマツと常緑広葉樹（照葉樹）の混交林が多い。また山腹斜面を中心に牧畜業が営まれ、豚、黄牛、山羊などが飼育されている。この地区では、木地製作、竹細工、土器製作などの伝統工芸に従事する工人や職人および彼らが形成する集落が存在する。しかし現在では、これらの職種を専業とするものが減少し、農閑期を主体に副業として細々と実施している場合が多くなっている。住民はナシ族、ペー族、回族、漢族などで、州の他地区で多数を占めていたチベット族は多くない。

以上論じたように、迪慶蔵族自治州においては、海抜高度をメルクマールにして大きく三つの地区に区分できる。そして、それぞれの地区に分布・居住する民族集団が異なっている。すなわち、各地区にはおおまかではあるが、民族集団ごとに住み分け現象が認められる。チベット族は、他の民族集団と比較すると海抜高度が高い（1）の高寨地区および（2）の山区に分布・居住するものが多いという特色がみられた。かかる点は、チベット族の最大の結集地域であるチベット高原が、既に述べた如く、平均海抜高度が四五〇〇メートルであるという高地に位置していることからも推測できるように、チベット族は高地を好み、遊牧を主体とした生活に従事していることに起因すると思われる。一方、主要な産業である農・牧業以外に従事するものは、（3）の河川地区に集中している。この点は、かかる地区が州の中では比較的農作物の収穫に恵まれることから、住民は相対的に豊裕なものが多い。そのため製作した商品を購入する能力があることと、主要道路がこの地区に発達しているため州都香格里拉や麗江などの大消費地に販売しやすいことなどが考えられる。民族的にいえば、これらの製品の製作はチベット族に限定されず、他の少数民族間でも実施しているのが特色といえよう。

二、香格里拉県の伝統的な工芸品

前章の後半では香格里拉県が所属する迪慶蔵族自治区を、海抜高度をメルクマールにして三地区に分類し、それぞれの地区の特色に関して説明を加えた。理由は、それぞれに区分された地区においては、地形や気候などを中心とする

自然地理学的条件が明らかに相違していることから、主要な生業形態と看做される農・牧業さらには居住する民族集団も異なっているからであった。すなわちこのことが、木地製作や土器製作に代表される伝統的な工芸品の製作や製造と関連しているという事実が認められるからである。というのは、既述した如く、当地域においては、近年州都香格里拉や地域最大の観光地である麗江などの大消費地では観光客目当てに店舗を構えて個人商店として営業を行なっているものもみられる。しかし、多くは、わが国の山中にかつて存在した木地屋集落（田畑二〇〇二）のように、それぞれの伝統的な工芸品を製作する住民によって形成された集落が互いに独立して存在しているからである。[20]

香格里拉県は、既に論じたように、雲南省北端に位置する、迪慶蔵族自治州を構成する三つの県および自治県の一つである。香格里拉県は、長江上流金沙江によって大きく東西に二分される州の東側全域を占める。前章で紹介した海抜高度をメルクマールにした区分に従えば、県城香格里拉（中心鎮）の高度が三二七六メートルであるように、県内の大部分の地域が（1）の高寒地区、（2）の山区によって占有されている。現在、県には一〇の郷と鎮および五七の行政村が設置されている。[21] 県の総人口は一二、二万人（一九九〇年）で、そのうちチベット族が九、五万人で78パーセントを占めている。

最初に香格里拉県にみられる木地製作以外の伝統的な工芸品に関して、かかる製作・製造の実態を検討しておく。[22]

前述したように、香格里拉県では一部に共通した製品がみられるが、県内に分布・居住する民族集団により伝統的な工芸品が異なっているという特色がみられる。理由の第一としては、それぞれの民族集団の生業形態あるいは嗜好品と大いに関連すると考えられる。第二としては、それぞれの民族集団が海抜高度差による住み分けをおおまかにであるが実施しているという、各民族集団が居住する生活圏の自然地理学的条件とも関係があると看做せる。以下では香格里拉県に分布・居住する主要な民族集団にみられる伝統的な工芸品のうち、代表的なものに限定して分析することにする[23]（第1表）。

土器製作は、県の総人口の40パーセントを占めるチベット族が中心である。当県の土器製作の起源は古く、春秋戦国時代（紀元前七七〇―紀元前二二一年）に西部に位置する尼西郷で開始された[24]（第1図）。土器製作の技術は中

第1表　香格里拉県の伝統的な工芸品

項目／民族名	人口（割合）（人）	木地製作	土器製作	竹細工	銀細工	皮革製作	紙づくり
チベット族	50.321（41.2％）	○	○	○	○	○	
ナシ族	21.613（17.7％）			○		○	○
リス族	9.058（7.4％）			○			
イ族	7.640（6.3％）	○		○	○		
ペー族	4.146（3.4％）	○	○	○			

〔出所〕現地での聞き取り、および迪慶蔵族自治州地方志編纂委員会編（2003）『迪慶蔵族自治州志（上）』雲南民族出版、迪慶蔵族自治州民族宗教事務委員会編（2001）『迪慶蔵族自治州 民族誌』（内部出版）、雲南省中甸県地方志編纂委員会編（1997）『中甸県志』雲南民族出版による

華民国時代（一九一二―一九四九年）に飛躍的に高まり、生産も増加した。主要な製品は茶葉を保存するための茶罐、現地で茶葉運搬用の器（揺具）と呼ばれる茶壺、料理に用いられる土鍋（火鍋）の三種類である。前者の茶罐、茶壺にみられる茶葉を保存したり、運搬するための土器が当地で製作されるのは、茶馬古道と大変関連があると推察させる[25]。すなわち、県内の土器製作の中心地である尼西郷がかかる茶馬古道沿いに位置しているからである。また、土鍋は尼西火鍋という名称で、地元の特産物として名高い。

土器製作がとくに盛んに行なわれているのは前記の尼西郷のなかでも、木茸古、細奔古、都細古の三集落（村民小組、寨）である。これら三集落では、いずれも土器製作による収入が年収の50パーセントを越えており、土器製作に特化している。主要な出荷先は県内の主体となっているが、徳欽県、維西傈僳族自治県など隣接する県や自治県および麗江である。郷内の土器製作の全盛期であった一九六一年には、四、一五万元の売上げ収入が得られた。しかし、一九七八年に創設された尼西土陶社が一九八二年に休業に追い込まれ、各戸の個別生産に移行したために、生産は衰退を辿り、一九九〇年以降では総売上げ収入が一万元ほどに

減少している。このような状況になったのは、交通の便がよくなった結果、他地域で製作された安価な製品が大量に出回りだしたことによるとされる。

竹細工は、県内のほぼ全域において農家の副業として農閑期を主体に製作されている。高所である高寨地区を除けば、原料である竹が自生しているからである。主要な竹細工は、穀類をあおってその中に混入している殻や塵などを分け除く箕、主として水切りに用いる中央が窪んだ円形の笊、粒状あるいは粉状のものを大きさによって選り分けるために格子状に編まれた篩、塵を回収して捨てる塵取りなどである。しかし、精巧な高級品は少ない。それ故、一部の製品は販売されるが、自家消費することが多い。そのなかでも、狩猟生活を伝統的に生業としてきたリス族の男性が編む箕や篩は比較的精巧なため、周辺に居住する他の民族集団との間で不足ぎみである米・麦などの食糧品と交替されることもある。また同様に、イ族が編む竹細工も比較的精巧である。イ族は農業よりも牛などの放牧を主体とした牧畜業に従事しているものが多い。そのため多量の牛乳が入手できる。その多量の牛乳を煮つめてバター状の油（酥油）を入れる容器など特殊なものも製作している。

銀細工は、チベット族とイ族のみが製作している。これら両民族集団が製作する銀製品は、女性が身に付ける首飾りなどの装飾品が中心であるという共通点がみられる。しかし、イ族のほうが首飾りの他、耳飾り、腕輪、かんざし状の頭飾り、衣服のボタンなどその種類が多いので特徴となっている。なおチベット族は、上記の銀製品の他に男性が常用している蔵刀と称される万能ナイフや、主食ツァンパを盛る椀に銀箔をはった銀箔椀も製作している。[26] これらの銀製品の販売はチベット族およびイ族に限定されるが、一部の製品は、観光地である麗江などの土産店においても並べられ、販売されている。

皮革製作はチベット族とナシ族が中心である。両民族集団は生業形態が共通し、ともに羊や牛を飼育する牧畜業が主体となっている。主要な製品はこれらの飼育している羊や牛の皮を利用したクツ（チベット族独特のチベットグツ、一般の皮グツの二種類）、ゾウリ、チョッキを中心とする皮製の衣服、小物を入れて腰につるす腰袋などである。他地域にはこれらの皮革製品を製作する職人によって構成された集落が存在する。しかし県内ではそのような集落はみられない。皮革製品は、他民族や観光客が購入を希望する

ことが比較的多い。そのため、県城香格里拉や、大観光地の麗江で店舗を構えて販売しているものもいる。伝統的には、皮はぎ、なめしなどの一連の作業を単独で行なっていた。しかし近年では需要が増加したこともあり、それぞれの工程を分業するものも増えている。一九九〇年では、県内においてチベットグツ一五〇〇足が製作され、四〇万元の収入をあげている。

紙づくりはナシ族のみが実施している。ナシ族はトンパ（東巴）文字と呼ばれる独自の固有文字を有している。そのトンパ文字を書く用紙として紙の需要が存在するのである。またこの用紙は、トンパ族固有の信仰であるトンパ教の経典を筆写する用紙としても用いられる。紙の原料となるコウゾ（构樹 *Btoussonetia kasinoki*）は高寨地区、山区、河谷区の三地区に関係なく自生している。そのため原料は豊富といえる。主要な製作地域は県東南のナシ族が多数を占める三壩納西族自治郷である。

この他伝統的な工芸品としては、鎌、鋤、斧などに代表される農具があげられる。これらの農具を製作する鍛冶業は、他の伝統的な工芸品の製作と比較すると、製作技術の習得が難しい。かような関係からと推測されるが、鍛冶屋はこの地に古くから定着していたのではなく、漢族など他民族が転入して製作に従事しているものが多い。一九九〇年には県内に四〇戸の鍛冶屋が農具などの製作を行ない、五一、二万元の収入があった。近年、土器製作同様、交通路が整備された結果、他地域から安価な製品が流入しだし、県内の生産が減少傾向となっている。

以上の伝統的な工芸品の製作・製造に対して、香格里拉県の木地製作は次のような特徴をもっている。すなわち、上述した伝統的な工芸品は土器や農具製作の場合に典型的に見られるように、主として近年における道路網の整備・発達とともに、安価な製品がしかも大量に流入することになり、衰退傾向がみられる。これに対して、木地製品はこれらの伝統的な工芸品とは若干異なるようである。というのは、椀に代表される木地製品は、他の伝統的な工芸品と比較すると、既に指摘したように全盛期よりも量的には減少しているが、一定の安定した需要が存在するため急速な減少がみられないからである。理由は、木地製品の主力製品である椀はチベット族のみが使用しているが、他の容器に変更することが困難だからである。

かかる点に関する論点を簡潔に繰り返すと、チベット族

は食事をするときに用いる食器（椀）を各自が衣服の中に入れるなどしてもち歩くという習慣がみられる。そのため、重くて壊れやすい陶器製の碗は不向きなのである。したがって、木地屋が製作する椀が現在においても一定の需要が存在するのである。[27] しかも、海抜高度の関係からチベット族居住地区には原木となる広葉樹の大木が多くない。それ故、他省にみられるように会社（公司）形式の大量生産が難しい。以上のことから、木地製作は、チベット族居住地区に関しては一定の需要が見込まれるので、製作が継続しているのである。

木地製作は、チベット族を筆頭にイ族やペー族も行なっている。チベット族の木地製作は、前述した如く、食器として日常使用される椀を中心となる。チベット族では椀は次のように使用される。

まず、各人に食べる分量によって異なるが、一般には椀の中に半分ぐらいの量のチンクー麦を粉にしたツァンパを入れ、そこに熱湯を加える。[28] ツァンパは他家を訪れた場合、その訪問した家でもらう。椀は左手に持つことを原則とし、右手の中指と人差し指の二本を使ってこねる。箸などの食器は使用しない。こね具合は熱湯の量で加減する。こねの作業が終わると、右手で口にはこび食べる。そのとき、食塩・砂糖などの調味料は入れないし、副食物もない。ツァンパは、細長い木筒の中に茶葉とバターを入れて、熱湯と加え撹拌した飲料であるバター茶とともに食べられる。

材料となる原木は、硬質のコナラ属やツツジ（杜鵑 *Pho dodendron spp.*）などの高山性低木林が中心である。チベット族では、右述の椀の他にツァンパを保存する大型の鉢（わが国の木地鉢）などを製作する。これらの製品はいずれも塗をかけない白木地である。しかし、高級感を出すために一部の椀は底の部分（足と呼ぶ）を高くし高坏状のものにしたり、銀箔をはることもある。これに対してイ族の木地製作は、基本的にはチベット族とほぼ同様であるが、木地鉢および杓子が中心となる。後者の杓子は、ご飯を椀に盛りつけるときに用いるので、その形状もわが国のものと同形である。しかし、杓子は製作工程においてはロクロを使用しない。それ故、厳格な意味では木地製品とはいえない（田畑２００２：６３―７０）。

イ族の木地製作の特徴は、製作した製品に漆をかけることである。ウルシ（漆樹 *Rhus vernieiflua*）はイ族居住地区に自生している。原料の確保が容易となる。これに対し

て、チベット自治区内のチベット族居住地区では海抜高度が高く、冷涼地であることからウルシはほとんど自生していない。既に述べたように、木地製品に漆をかけるのは、木地製作者である木地屋とは異なり、漆塗りの専門職人である。[29] ペー族も木地製作に従事するものもいるが、少人数で製品も量的に多くない。

県内の木地製品製作地域は、チベット族では尼西郷に集中し、木地製作者で構成される集落（木地屋集落）を形成している。イ族は虎跳峡鎮宝山村、山壩納西族自治郷老炉房などに集中している。しかし木地製作者のみの集落は交通の便が悪い辺地にあるので、木地製作者の一部が県城香格里拉に店舗を構え、個人で木地製作を行っているものもいる。香格里拉には既述したように、雲南省最大のチベット寺院である松賛林寺があり、参拝に訪れるチベット族に需要があるためである。[30]

三、尼西郷の木地製作

前章で論じたように、雲南省の最北端に位置する迪慶蔵族自治州の西部一帯を占める香格里拉県は、チベット族を筆頭にナシ族、リス族、イ族および漢族などの多数の民族集団が居住している。しかも、県の行政・経済の中心である県城香格里拉を主体に居住する漢族を除き、各々の少数民族の生活圏は、高所から他所にかけてチベット族、イ族、ナシ族というように、海抜高度をメルクマールとした住み分け現象が顕著に認められる。[31] それ故、伝統的な工芸品に関して、それぞれの少数民族が製作あるいは製造する製品が異なっているという特徴がおおまかであるが確認できる。理由は、各民族集団が経済活動の基盤としている生業形態の相違と同時に、分布・居住している地域の海抜高度に規定される自然地理的条件などに大きく左右されるからである。本県における伝統的な主要工芸品である木地製品も、かような生業形態や自然地理的条件などに影響を受けているといえよう。すなわち、かかる条件に恵まれた地域が県の北西部を占める尼西郷なのである。

尼西郷は、香格里拉県の県城香格里拉から北西方向に三九キロメートルほど離れた所に位置する。郷中央を北西から東南にかけて昆明とチベット自治区の区都ラサを結ぶ滇蔵公路が走っている。郷の平均海抜高度は三一六〇メートルで、大部分の地域が高寒地区である。[32] 尼西郷は、中華人民共和国成立後の一九五八年にに尼西人民公社が創設さ

れ、集団体制が続いた。その後一九八二年に人民公社が解体され、生産責任制が導入された。そして郷内には、江東、潟満、新陽、幸福の四行政村が置かれ、四行政村はその下部組織として四七の自然村（村民小組、寨）を統括している。戸数は一一七八戸、人口は六四二五人である。そのうち、チベット族がもっとも多く、総人口の97・9パーセントを占めている。主要な産業は、チンクー麦、小麦、トウモロコシ、ジャガイモなどを栽培する農業と、黄牛、羊、ヤクの放牧を主体とする牧畜業である。その他、近年郷人民政府は特産品である鶏（尼西鶏）の養鶏に力を入れ、県民の収入の向上を目指している。

右述した特徴を有する尼西郷であるが、木地製作は郷全域で実施されているのではなく、幸福村のみである。[33] 幸福村は平均海抜が二四〇〇メートルで、その下部組織として一五の寨（村民小組）がある。幸福村は郷の中心から北西方向に約二八キロメートル離れている。戸数は三九一戸、人口は二〇五〇人である。木地製作を実施しているのは、二つの寨つまり上橋頭寨と行多寨のみである。本稿ではそのうち上橋頭寨の木地製作を中心に話をすすめる。[34]

上橋頭寨は、現在戸数が三六戸、人口一六二人であり、そのうち木地製作に従事するのは八戸である。以前にはもう少し多くの家が木地製作に従事していた。しかし。後継者不足などの理由で減少傾向にある。中華人民共和国成立後、上橋頭寨の木地製作の変遷をまとめたのが第2表である。この第2表を参照しながら上橋頭寨の木地製作の変遷を検討していくことにする。

中華人民共和国成立以前の木地製作の状況は、第2表からは読み取ることができない。しかし、古老の話などを総合すると、現在同様に各戸が個別に木地製作を行なっていた。当時木地製作を行なっていたのは、総戸数が性格に判明しないが、当時の戸数十二戸の大半が木地製作に携わっていたようである。[35] 木地製作は年中実施されたのではなく、農閑期主体に需要があれば農繁期でも行なっていた。当寨においては、木地製作以外主要な現金収入源がほとんどなかったからであった。製作された椀を中心とする木地製品は、自らが販売に出かけるのではなく、チベット地方から当寨まで買い付けに来た仲介人に売却した。

右述した木地製品の製作形態は中華人民共和国成立後も継続された。しかし、この期間は政治的にも不安定な時期であったことから木地製作が盛んでなかった。また製品の

第2表　木地製作（上橋頭寨）の変遷

項目／年度	経営体の名称	参加戸数(戸)①	主要製品	生産高(年)／生産額(年)	生産時期	備　考
1950	各 戸	39	椀・鉢	2000個／	農閑期	県中心に販売。一部はチベット・麗江など
1958	中甸県木器生産合作社	12	椀・鉢		農閑期	農業中心に木地業は副業に。生産低下
1961	尼西木器生産合作社	17	椀・鉢		農閑期	うち16戸が上橋頭・行多両寨
1971	尼西木器社	18	椀・鉢	73700個／1.2万元	年中	雲南省軽工庁より援助を受ける
1981	中甸民族木器社	22	椀・鉢	／6.12万元	年中	白木地より塗りまで一貫製作、動力に電気モーター使用
1982	中甸民族木器社		椀・鉢	31600個／7.9万元	年中	生産責任制導入
1983	中甸民族木器社	休業				工人寨に帰るもの多し
1990	中甸民族木器社	復業	酒杯・茶罐	20110個／6.76万元	年中	国家援助、上橋頭・行多両寨で木地製作（5000個）

〔出所〕雲南省中甸県地方志編纂委員会編（1997）『中甸県志』 雲南民族出版、601－602頁による　　註① 登録人数の数を戸数と看做した。

販売も県内が主体であった。一九五八年に人民公社制が導入された。かかる集団指導体制に伴い、尼西郷が所属する中甸県（現香格里拉県）では、上橋頭寨および行多寨を中心とした県内の木地製作者を結集した合作会社が創設された。しかし当時は農業生産の増大が主要な目標であった。それ故、木地生産合作会社といえども農業生産の増大に重点が置かれ、木地製作は農業の副業として位置づけられていた。かかる合作会社の形態と類似した企業体が、その後尼西木器生産合作社、尼西木器社、中甸民族木器社とそれぞれ名称を変更して、木地製作が農閑期を中心に実施された。このように、企業体の名称がたびたび変更されたのは、一九七一年に尼西木器社が雲南省軽工庁より資金援助を受けたことに代表されるように、原木などが減少したためその購入資金が不足がちになり、関連諸官庁からの援助によることが最大の理由とされる。

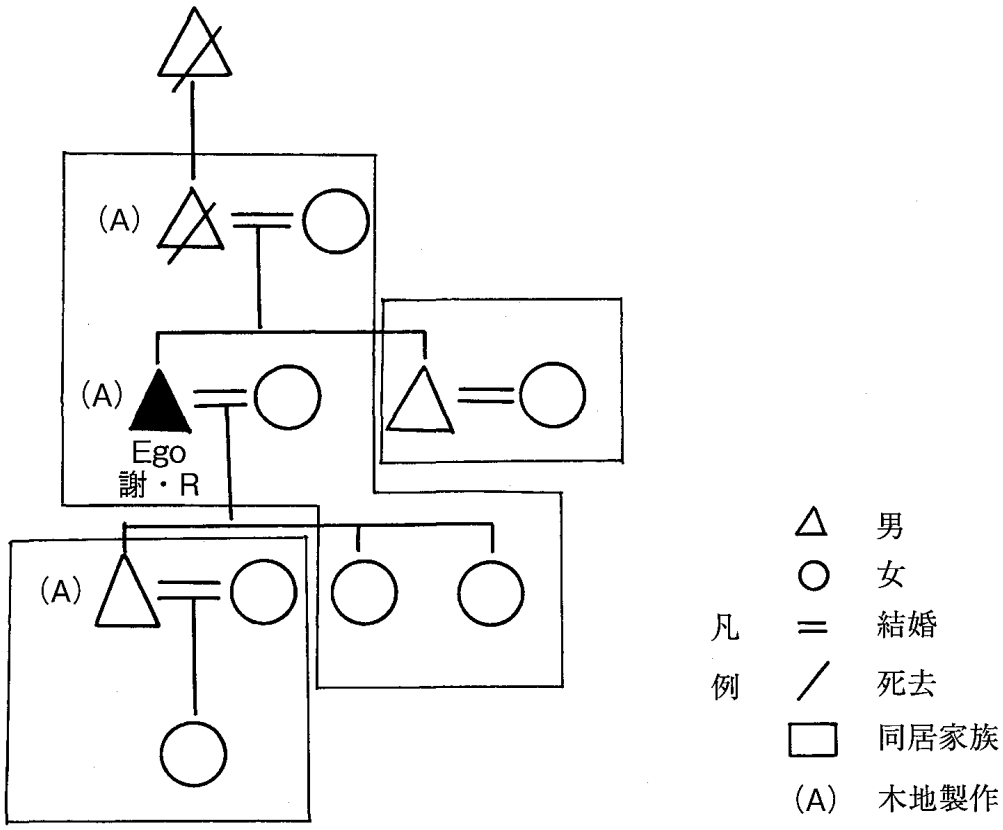
一九八二年には人民公社が解体され、生産責任制が導入された。しかし、木地製作に関しては期待できるような業績がみられず、翌年中甸民族木器会社は休業に追い込まれた。[36] その後、木地製作に従事する工人はほとんどが出身郷である尼西郷の上橋頭寨および行多寨に戻り、個別で木地

製品の製作に従事した。一九九〇年には休業していた中甸民族木器社が、国家の資金援助を受け、香格里拉で復業し、酒杯、茶罐、囲棋盤などを製作した。このとき、尼西郷に戻っていた一部の木地製作者は、中甸民族木器社に帰ったが、そのまま尼西郷で椀を中心に木地製作に従事するものもあった。現在、中甸民族木器社は国家の援助が期待できなくなった。そのため、工場の設備は残っているが、操業するものは数戸にすぎず、尼西郷でも木地製作をしているもののほうが多いという状況である。次に、上橋頭寨の木地師を分析することにする。

上橋頭寨でいつごろから木地製作が実施されるようになったかは不明である。中華人民共和国成立直後に行なわれた土地改革期には、上橋頭寨の戸数は十二戸であった。そのなかの大部分が木地製作に従事していた。前述のように木地製作はロクロなどの特殊な工具を用いて、椀や鉢などを製作する。しかし本来は、チベット自治区の木地製作者の如く、製品（白木地）に漆をかけない状態で白木地の製品を木地製作者が製作した。その製品に漆をかけると高級感が出るし、腐敗を防止することもできた。そのため漆をかけた製品が好まれた。

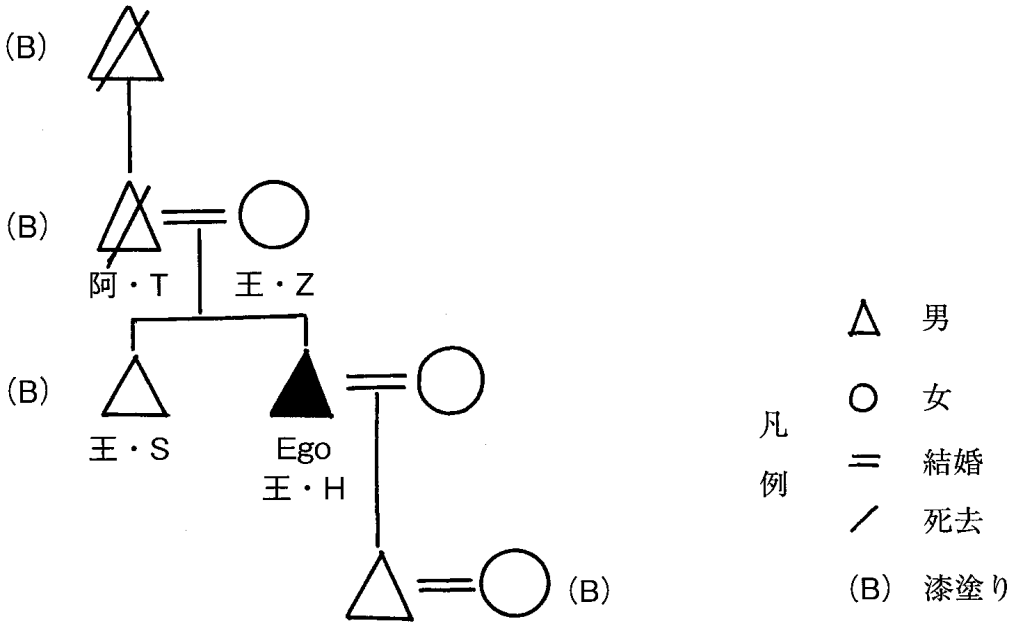
上橋頭寨の場合、元来は木地製作を専業とする木地製作者つまり木地屋ではなく、その製品に漆をかける塗師屋であったが、彼らが木地製作に関係を持つようになったのではないか、と推察される。理由は、上橋頭寨で最初に白木地の椀に漆をかける作業を開始したのが、馮・W家の高祖父（馮・R）であった。馮家では、その子つまり馮・Wの祖父の代から木地業を開始したからである。かかる事例は、上橋頭寨の他家での聞き取りでも確認できた。上橋頭寨で漆をかける塗師業がはじまったのは、当時漆液を採取するウルシの原木が周辺に豊富にあったためと推測できる。チベット族の最大の結集地域であるチベット自治区は海抜高度の関係でウルシが生育しない。そのため白木地に漆をかけることは充分にできなかった。それに加え、チベット自治区にはその技術を習得した職人がほとんどいなかった。かような事情から、チベット自治区近くで周辺にウルシが自生している尼西郷で、漆かけが開始されたのであろう。その他、尼西郷は古くから茶馬古道でラサと結ばれる街道沿いに位置していることも、かかる要因の一つと言えよう。

上橋頭寨では現在八戸が木地製作に従事している。そのうち三戸は、本人、兄、息子という同族である（第2図）。



第２図　謝・Ｒ家の同族

〔出所〕現地での聞き取りより作成



第３図　王・Ｈ家の家族構成

〔出所〕現地での聞き取りより作図

第2図の謝・Rは現在五二歳でチベット族である。祖父は同寨出身であるが木地製作ができなかった。その時代当家は耕地をほとんど所有していなかった。そのため、他家の農作業の手伝い（作男）や、人夫などをして生活を維持していた。父親も中華人民共和国成立以前では祖父同様農作業の手伝いなどをしていたが、香格里拉県に北接する徳欽県奔子欄のチベット族から木地製作の技術を習った。謝・Rも、その父親から木地製作の技術を学習した。また長男は、父親から木地製品を製作する技術を習った。このように、同家では、父親の代から木地製作を開始し、その技術は子供に伝えている。

なお、謝・Rは、白木地に漆をかける技術も有し、それを現在でも行なっている。上橋頭寨では漆塗りを行なっているのは謝・Rを含めて四人（戸）のみとなっている。当家では、椀を製作しているが、二〇〇四年度の年収は弟の分も含めて四～五万元であった。副業としては非常な高収入である。販売は県内ではなく、チベット自治区に居住するチベット族向けである。一九八三年ごろからチベット族の仲介人に依頼され、椀を専門に製作するようになったためである。仲介人は年に三回ほど品物を取りに当家にやって来る。販売価格は、小椀の場合一個当り二〇元、大椀は四～五〇元である。椀の材料となる原木は周辺に自生しているツツジが中心である。しかし、多くの原木が必要なため、購入している。当家の椀製作の特徴は、需要があり次第農閑期でなくても木地製作を行なっていることである。高収入が期待できあるからである。

謝・R家では、右述の椀製作以外農業も行なっており、食糧はほぼ自給できる。具体的にいえば、畑地を一・五畝（一畝は六・六七アール）所有している。畑地は生産責任制導入時分配されたものである。ここにトウモロコシと小麦を主として栽培している。トウモロコシは年度により収穫が多少変動するが、一畝当り一〇〇〇斤（一斤は五〇〇グラム）、小麦だと五〇〇斤の収穫が期待できる。二〇〇四年度ではトウモロコシと小麦を合わせて一五〇〇斤の収穫を得た。その他菜園も〇・五畝所有している。菜園ではトマト、ウリ、各種の豆類などの野菜が自家消費用として栽培されている。家畜としては、黄牛（成牛、小牛など）六頭、ラバ一頭、馬一頭、豚一匹、鶏二〇羽、犬一匹を飼育している。また、ミカン、ユズ、ナシ、リンゴなどの果樹も数本ずつであるが植えている。当家は上橋頭寨では平均的な農家であるが、椀などの木地製品の販売による現金収

入が得られるので、比較的豊かである。

漆塗りを専業としている事例として、王・H家（第3図）をとりあげる。同家は既述した上橋頭寨で漆塗りを行なっている四戸のうちの一戸である。王・Hの父親（阿・T）は婿養子である。阿・Tは尼西郷出身のチベット族なのであるが、中華人民共和国成立以前にラサで漆塗りの仕事をしていた。そのとき同郷の上橋頭寨出身の母親と知り合い、婿入りした。阿・Tがラサで漆塗りの仕事をしていたのは、ラサに居住するチベット族からラサで漆塗りの仕事をするようにと頼まれたからである。ラサには他の用事で出かけるものもいたので、尼西郷からキャラバンを組んでかけた。漆塗りの技術は祖先から伝来されたものであった。夫（王・H）の弟（王・S）も中華人民共和国成立当時から漆塗りの仕事に従事していた。王・Hは、一九六一年に尼西木器生産合作社に入り、木地製作を行なったこともある。現在は高齢のため漆塗りをしていない。その代わり、息子の嫁が弟とともに漆塗りを行なっている。嫁は王・Hからその技術を教えてもらった。

当家では漆掻きは行なわない。使用する漆はすべて購入している。購入先は、近くに位置する納西傈僳自治県の塔城からである。二〇〇四年度では五〇斤の生漆を一斤当り二八〇元で購入した。また漆に混ぜる桐油は一斤当り二〇〇元で三〇斤購入した。桐油は同じ塔城で買った。現在当家では木地製品の製作は行なっていない。そのため、寨内で制作された白木地の椀を購入し、漆をかけている。二〇〇四年度は四万元余りの収入があった。前述の謝・R家同様、当家も農業を行なっている。しかし、栽培している作物はすべて自家消費用である。

以上論じたように、上橋頭寨では、木地製作および漆塗りを行なっている家は、副業とはいえないほど高収入を得ている。理由は、右述した如く、上橋頭寨では木地製作者の数は減少しているが、椀を筆頭に木地製品はチベット族の間では需要が存在するからであると、推察される。上橋頭寨では、現在では電気モーターを動力源とする電気ロクロによって木地製作が行なわれている。電気ロクロによる木地製作は短期間で大量の製品を製作することができる。それ故、今後は原木の不足に悩むことになる恐れは充分ある。

四、木地製作の今後の展開　―結びに代えて―

これまで論を展開してきたように、尼西郷上橋頭寨を中

心とする木地製作は、県内の伝統的な工芸品の大半が大きく減少あるいは廃業に近い状態に追い込まれているのと比較すると、確かに減少傾向がみられるが、一定の安定した需要が期待できる。本文中においてもその理由について言及したが、再度その理由を確認しておきたい。木地製作は、尼西郷が所属する香格里拉県の伝統的な工芸品の中では、現在でも一定の需要が存在するという大変特異な存在であると思われるからである。

尼西郷上橋頭寨において木地製作が安定した収入を得ることができるのは、次のような条件がそろっているからであると推定できる。その条件とは、第一に、チベット族にとっては椀が日常に使用する食器としては不可欠だからである。[37] すなわち、チベット族は自分が食べるときに用いる食器（椀）は各自が持参するという習慣がある。それ故、一般に使用されている陶器製の椀は重く、かつこわれやすいため、持ち運びに便利な軽量で、こわれにくい椀が重宝されるのである。

第二としては、他地域では、台湾あるいは福建省の資本による比較的大規模な会社（公司）が、木地製作を電気ロクロを用いて行なっている。これらの会社では大量の製品が製作されているので、非常な安価となる。[38] しかしながら、チベット族居住地区は原木となる広葉樹の大木が非常に少なく、大量生産に向かない。しかも、他地域のものは大量に製作されるので、製品が粗雑なものが多い。椀は直接に口や手に触れることから、その感触も重視される。この点からも、会社形式で大量に製作される椀は、チベット族に合わないようである。また、チベット族の居住地区は中国でも辺境の地なので、運搬にかかるコストも高い。この点も不利となっている。

第三としては、近年軽量かつ安価な合成樹脂（プラスチック）製の碗が出回っている。しかし、これらの合成樹脂製の碗は熱湯を入れると非常に熱くて持ちにくい。そのため、チベット族の間では椀を好む傾向が依然として強い。

しかしながら、以上の三条件のうち、とくに第三の合成樹脂製の碗に関しては素材の改良などで熱伝導しにくい碗も開発され、出回りはじめている。それ故将来においては、これらの合成樹脂製の碗が木製の椀にとって変わる可能性も皆無であるとはいえない。今後の動向に注目したい。

なお、本稿においては具体的な木地製作工程に関して論述することができなかった。チベット族の木地製作工程は、

例えば、ロクロ軸の先端に「鉄の爪」と称するものを取り付け、製品に見合うような大きさに輪切りにした原木を固定することが一般的に行なわれる。しかし、上橋頭寨の木地製作ではかかる「鉄の爪」が用いられず、原木の端を削りロクロ軸に直接にはめ込んでいる。この形式は、「鉄の爪」が発明される以前の形式を示していると看做される。本稿は、チベット族の伝統的な工芸品の分析・検討に関する予察的な考察という意味合いをもつ。木地製作工程などの技術的な点は、今後更に事例を多く収集して考察したく念じている。今後の研究課題としておきたい。

本稿は、平成十七年度大学教育高度化推進特別経費課題「西南中国における少数民族に関する生業形態の比較研究と国際化教育の推進」による成果の一部である。また、本稿の一部については、平成十八年六月四日に開催された日本文化人類学学会第四〇回研究大会（於東京大学）において口頭研究発表「チベット族の木地製作 ― 雲南省香格里拉県を事例として ―」（共同発表、同研究発表要旨二〇七頁）した。

註

（1）轆轤は碗に代表される陶器製作にも用いられる。しかし、その形式（外形）は木地屋が使用するものと全く異なっている。それ故、本稿においては、陶器製作用の轆轤と区別するために、ロクロとカタカナ表記とする。

（2）但し、明治時代に入ると、東北地方の木地製作の工人が新天地を求めて、石狩川上流の屯田兵村に定着したことがあった。しかし、当地における木地製作は原木が不足するため長くは続かなかった。

（3）同様の事例としては、漁民が釣針などに代表される漁獲技術あるいは大漁が見込まれる好漁場の拡散を防ぐために、漁民同士が結婚することがあげられる。また飛騨の白川郷や越中五ヶ山にみられる合掌造り家屋にみられる大家族制度は、養蚕の技術拡散を防ぐ目的で、結婚しても分家あるいは嫁としての転出が認められなかったために、生じたものといわれている（江馬１９４３、玉城１９５９）。

（4）木地屋を最初に注目したのは、明治時代後半に茸栽培や木炭焼製の技術など山林副産物の指導に従事した田中長嶺であった（中村・安井・浜口１９６７）。田中長嶺は各地の山村の指導にあたっているとき、木地屋の存在を知り、その概要をまとめた（田中１９００）。なお、柳田國男は木地屋に関して本論文以外に二編の論攷（柳田１９１３、１９２５）を発表している。

(5) その他、中国に関していえば、少数民族を研究する研究者は、少数民族出身者が自民族を研究するという傾向がみられたうえに、研究者も限られているが、その限られた研究者もほとんど木地製作に代表される物質文化に学問的関心をもつものが少ない。それ故、従来より木地製作および木地屋集落が注目されてこなかったこともあげられる。

(6) しかしながら、近年わが国においては、食器具として木地椀の良さが見直され、一部では木地椀を筆頭に木地製品の需要が高まった。しかし木地屋が製作する木地椀などの木地製品は高価である。そこで、このことに注目して、台湾および中国南部を中心に公司（会社）組織による木地椀の大量生産が行われるようになった。日本への輸出向けである。これらの木地製品は、ロクロの動力として電気を用いるもので、熟練度の低い工人が製作している。そのため、製品の品質は一般に不良であるが、低価格なので需要も多い。

(7) 周知のように、チベット族では他家を訪問中食事どきになると、各自がそれぞれの椀を取り出し、そこにハダカ麦の一種であるチンクー麦を炒って粉にしたツァンパを入れてもらい、もらった湯をかけて手でこねて手食するという習慣がある。

(8) かかる傾向がみられるのは、海外でフィールドサーヴェイを実施する地域の住民は、かつて固有の文化を所有していなかった場合が多く、文字による史料の収集が困難であることがあげられる。

(9) 但し、筆者が現地で収集した文献史料は中国語（漢語）に限定される。本来であれば、研究対象であるチベット族はチベット語という固有の文字を使用している。しかし木地製作に代表される物質文化に関しては、チベット語で書かれた専門的な文献がほとんどみあたらないこと、筆者がチベット語を自由に読んだり、分析することができないため、中国語（漢語）のみとした。

(10) 中国は世界で最大の人口を擁する国家で、人口総数は十三億人を超えた（『中国統計年鑑』２００２年版による）。その人口の大半は総人口の約92％近くを占める漢族である。少数民族とは漢族以外の民族集団のことである。少数民族とは人口規模が小さい民族集団を示す専門用語であるが、一般の日常会話でも使用されている。しかし中国の場合、少数民族という用語には多少異なるニュアンスが付加されている。つまり、少数民族とは個々の民族集団の申請に基づき、政府が審査を行ない承認された民族集団のみが少数民族と認知されているのである。理由は、総人口の大多数を占める漢族とは異なり、現在では以前ほどではないが、教育あるいは税制さらには出産（田畑２００３）などの各種の面において少数民族を保護する優遇政策が講じられていたからであった。

(11) この語群を、デーヴィス（Davis）のように、東南アジア南

部に起源をもつと考えられる、オーストロアジア語群のモン・クメール語族に入れる説が存在する（Davis. 1909・田畑・金丸編訳1989：413―422）。本稿においては、拙著（田畑他2001：162―163）同様、漢・チベット語族的要素がオーストロアジア語族的要素よりも明らかに優っているという立場から、前者のほうに分類した。しかし、この分類に関しては検討する余地が残っている。

(12) 少数民族ではトン族と称される。この民族集団の自称は「カム」である。それ故、言語系統をはじめ言語学の表記では「カム」とされることが一般的である。本稿でもそれに従って「トン」ではなく「カム」を、用いた。なお「トン」とは、トン族に対する漢族などの他民族が付けた他称であり、地元でもトン族と呼ばれている。

(13) 中国では青蔵高原と称されている。青蔵高原は地形の相違などにより蔵北高原、蔵南谷地、チャイダム盆地、祁連山脈、青海高原などに大きく区分される。そのうち、蔵北高原のことを別名チベット高原と称している。したがって、わが国で使用されている名称よりも限定された内容を指すことになる。本稿ではわが国で一般的に使用されている広義、つまり中国でいう、青蔵高原の意味でチベット高原を使用する。

(14) 中華人民共和国の成立（一九四九年）以前、チベットは「領主の馬が青稞（チンクー麦―筆者註）を食い、農奴は雑草を食べていた」（木内編1984：336）という劣悪の状態であった。

(15) 言語系統上、チベット・ビルマ語群、チベット語系に所属する民族集団は、チベット族とメンパ族の二集団のみである。なお、メンパ族はメンパ語を話している。この民族集団がチベット語を話すことができるのは、かつてチベット族の宗教や文化と非常に密接な関係があったためとされる。とくに、メンパ族に伝承されている創世神話伝説「獅子蛮人」は、チベット族に伝わっている「神猴祖先」と同系列の神話とされる（田畑他2001：126―127）。

(16) 伝統的にチベット族は自らの居住地域を次の5つに分類し、それぞれの名称を与えていた。

①チベット北部の遊牧地帯　アムド（安多）
②チベット東部の遊牧地帯　カム（西康）
③チベット中央部のラサ地方　ユイ（衛）
④チベット南部の穀倉地帯　ツァン（蔵）
⑤チベット西部の遊牧地帯　アリ（阿里）

現在では、上記の③、④、⑤と②の西半分の地域がチベット自治区となっている（田畑他2001：117）

(17) 以下、チベットの歴史に関しては、グリンフェルド（Grunfeld）の著作（Grunfeld1987、八巻訳1994）を主として参照した。本書は欧米人の研究者が執筆したチベット近現代史の研

究書としては高い水準をもつ著述として高く評価されている。

(18) 中国政府は、少数民族問題を解決する政策の一つとして少数民族居住地域自治の方針を採用してきた。その方針の下に、州や自治区内においてとくに少数民族が集中して居住する地域を自治州とし、漢族の指導の下に居住している少数民族に自治をゆだねた。行政的には漢族居住地域の地級市と同様、二級（地級）行政区に該当する。少数民族居住地域ではモンゴル族の旗に等しい行政区である（田畑２００１：６―７）。

(19) 以下の統計数値は２０００年度のもので、迪慶蔵族自治州での聞き取りによった。

(20) ただし中国の場合、中華人民共和国成立後においても、人民公社制度が採用された期間（１９５８～１９８２年）。伝統的な工芸品を製作あるいは製造する集落も人民公社に組み入られ、集落としての機能が解体したこともあった。

(21) 以下の統計的数値は『迪慶蔵族自治州志（上）』（迪慶蔵族自治州地方志編纂委員会編２００３：７４）によった。なお二つの鎮とは、県城の香格里拉鎮（中心鎮）と虎跳峡鎮である。

(22) 周知のように中国では、全県が対外開放され、外国人が自由に立ち入ることが厳禁されている対外「赤開放地区」は皆無とされる。本稿の研究対象である香格里拉県も開放されている。そのため、県内は、吟巴雪山をはじめとする五〇〇〇メートルを越える高山、美しいV谷渓谷の虎跳峡、雲南省最大のチベット教寺院であるゲルグ派の松賛林寺、ナシ族の原郷の一つと看做される聖地白水台など、数多くの観光スポットに恵まれている。それ故、近年国内の観光客は勿論のこと、わが国を筆頭に外国人観光客でにぎわいをみせている。

しかし、椀や碗および竹細工などに代表される伝統的な工芸品は、日常生活用品が主体であるため、観光客の関心をひくものは少ない。そのうえ、これらの製品を製作・製造する集落は、県の中心地である県城より離れた交通の便がよくない場所に位置しているので、観光客が立ち寄ることは皆無である。

(23) 以下、香格里拉県にみられる伝統的な工芸品の記述に関しては、筆者の現地においての聞き取りの他、地元で刊行されている『迪慶蔵族自治州　民族誌』（迪慶蔵族自治州民族宗教事務委員会編２００１）、『中甸県志』（雲南省中中甸県地方志編纂委員会編纂１９９７）を参考にした。

(24) 尼西郷は戸数一〇四一戸、人口六一五九人（１９９０年）で、チベット族が総人口の96・7パーセントを占める典型的なチベット族居住区である。

(25) 雲南省、四川省、チベット自治区の間をつなぐ古代から発達した交易ルート。四川省や雲南省で栽培された茶葉と、チベット産の馬や薬草などの薬材との交易に利用された。かかる名称は、馬を使って茶葉などの商品を運搬したことに因んでいる。茶馬古道は唐代（７０５―９０７年）にその原形が生じ、そ

の後明・清時代（１３６８―１６４４年）に急速に発達した。普洱茶の生産拠点である雲南省普洱を中心に、チベット、北京、ミャンマー、ラオス、ベトナムに向けて合計五本の古道があった。尼西郷は普洱から北上してチベットに向かう古道に沿っている。現在では茶馬古道は、国内の観光客は言うに及ばず、外国人観光客も増加しており、西南中国最大の観光スポットになりつつある。香格里拉県が近年観光客の脚光を浴びるようになったのは、かかる茶馬古道が県内を南北に通じ、県城香格里拉がその古道の拠点の一つだからであるといえる。なお茶馬古道に関しては、『茶馬古道』（《茶馬古道》編集部編２００３）をはじめとする旅行案内書が出版されたり、『人民中国』（人民中国編集委員会編２００６年７月５日号）で紹介されている。

(26) 木椀に金箔をはる作業は、木地椀に漆をかける作業を木地屋が担当しないのと同様に、銀職人が行なう。

(27) その他、チベット族が使用する椀は漆をかけない白木地の椀である。椀に漆をかけるのは椀を高級にみせることと、長期間の使用に耐えるという二つの側面がある。わが国の椀は、例えば、輪島塗の椀に代表されるように、前者の高級感を出すことを目的としたものであるのに対して、一部のチベット仏教寺院などで使用する場合を除き、一般のチベット族が使用する椀には漆をかけない。この点は、江戸時代まで庶民が使用していた椀と同様なのであるが、一年間も使用すると腐蝕が目立ち新しい椀が必要となる。このことからも、椀は安定した需要が存在するのである。

(28) 椀以外の他の材料でできた碗、例えば、軽量な合金製あるいは合成樹脂製の碗では、熱湯を加えると碗が熱くなり持ちにくい。

(29) わが国の場合、ウルシの樹皮の表面だけを削り、表皮に掻溝という傷をつけ樹液を採取する作業およびそれに従事する人を漆掻きと称し、専門とする職人が行なった。すなわち、漆をかける漆塗りとは異なる職人であった。イ族の場合、同じ職人が漆掻きと漆塗りを行なった。

(30) 同様に観光客が集中する麗江では、椀以外にもキセルなどの土産品を製作し、販売している。

(31) 香格里拉県全域にわたって各民族集団の間では、本文で述べた海抜高度差による住み分け現象が認められる。しかし、例えば、リス族は虎跳峡鎮上江郷、金江郷など南部地区に、ナシ族は三壩納西族郷を中心とした東南地区というように、地域的な住み分け現象もみられる。

(32) 以下、尼西郷に関する統計数値は二〇〇四年末現在のものである。尼西郷人民政府での聞き取りによった。

(33) 尼西郷の伝統的な他の工芸品としては土器製作があげられる。土器製作も郷全域で実施されているのではなく、渇満村潟堆寨のみで行なわれている。同寨での土器製作は有名で、黒色の陶

器（黒陶）の土鍋（火鍋）が主として製作されている。

(34) 行多寨に関しては、二〇〇〇年一月中旬から二月中旬にかけて雲南大学の「雲南民族村寨調査」の一貫として、チベット族の集落の事例として調査が行なわれた。かかる民族村寨調査は、雲南省に居住する主要な二五の少数民族の集落をインテンシィヴに調査するというものである。行多寨については『雲南民族村寨調査　蔵族―中甸尼西郷形朶村』（雲南大学組織編写・主編高　２００１）という書名で刊行されている。集落名称が「行多」ではなく、「形朶」となっている理由は不明であるが、両集落名は発音が同じであることから、何らかの事情があり、同音の集落名に変更したのではないか、と推察される。なお、現地での聞き取りによっても「形朶寨」は「行多寨」のことであるとの確証を得た。行多寨は三九戸で、そのうち二戸のみが木地製作に従事している。各戸の年間収入は一〇〇〇～二〇〇〇元で、主として農閑期に製作している。

(35) しかしながら、上橋頭寨は後述するような事情から木地製作が開始されたのはあまり古くないようである。

(36) 理由は、生産責任制が導入される一年前の一九八一年に、それまで多数の木地製作者が居住する尼西郷にあった尼西木器社を、生産性を向上させたことや、販売しやすいという利点があるということなどから県城香格里拉に移動した。しかし、飛躍的な製品の販売拡大につながらなかったためとされる。なお生産性の向上とは、これまで動力をタービン水車に頼る水車ロクロも一部では使用されていたが、木地製作が一人挽きロクロによって実施されていたのを、動力を電気に求める電気ロクロが使用されるようになり、製品の製作期間が大幅に短縮され、大量生産が可能となったことを指す。

それまで流行していた一人挽ロクロは、ロクロの回転軸をのせる軸台の中央部を空洞にし、それが机のような台上に据えられた。机の脚部には別々の支点をもつ二つの踏み台あるいは踏み木が取り付けられ、足でこの踏み台あるいは踏み木を交互に踏むとロクロ軸が回転するという仕組みであった。尼西郷ではこの形式のロクロは存在しない。日本でも、大正時代末期から昭和初期にかけて電気ロクロの普及に伴い姿を消した。筆者は一九八六年中国貴州省の木地屋集落で可動している一人挽きロクロをみたことがある（田畑２００１：２７３―２７７）

(37) 上橋頭寨で木地製作が現在まで続けられているのは、木地製品の中でも椀を中心に製作していることも理由としてあげられる。

(38) かかる形式で椀が製作されるようになったのは、近年のことである。わが国に輸出するためである。現在わが国の市場に出回っている安価な椀は、このようにして製作されたものである。現在その一部が中国市場に出回り出している。

〔引用文献〕

Davis H.R.（１９０９）“YUN-NAN — The Link between India and the Yantze —” Cambide Univ. 田畑久夫・金丸良子編訳（１９８９）『雲南 —インドと揚子江流域の環—』古今書院

迪慶蔵族自治州地方志編纂委員会編（２００３）『迪慶蔵族自治州志（上）』雲南民族出版社

迪慶蔵族自治州民族宗教事務委員会編（２００１）『迪慶蔵族自治州志 民族志』（内部出版）

江馬三枝子（１９４３）『白川村の大家族』三国書房

国家民委民族問題五種叢書編輯委員会《中国少数民族》編写組（１９８１）『中国少数民族』人民出版社

Grunfeld A.T.（１９８７）“The Making of Modern Tibet” Zed Books Ltd. 八巻佳子訳（１９９４）『現代チベットの歩み』東方書店

中尾佐助（１９７１）『秘境ブータン』（現代教養文庫）社会思想社

中尾佐助（２００４）『中尾佐助著作集 第Ⅲ巻探検博物学』北海道大学出版会 １—２７３頁

橋本鉄男（１９７９）『ろくろ』（ものと人間の文化史）法政大学出版会

木内信蔵編（１９８４）『世界地理２ 東アジア』朝倉書店

村松一弥（１９７３）『中国の少数民族—その歴史と文化および現況』毎日新聞社

中村克哉・安井 広・浜口 降（１９６７）『明治殖産業の民間先駆者 田中長嶺の研究』風間書房

《茶馬古道》編輯部編（２００３）『茶馬古道』陝西師範大学出版社

人民中国編集委員会（２００６・７・５）『人民中国』（６３７、７月５日号）人民中国雑誌社

任 美鍔主編（１９８２）『中国自然地理網要（修正版）』商務印書館 阿部治平・駒井正一抄訳（１９８６）『中国の自然地理』東京大学出版会

杉本 壽（１９６７）『木地師制度研究序説』ミネルヴァ書房

田畑久夫（２００２）『木地屋集落 —系譜と変遷—』古今書院

田畑久夫（２００３）「人口政策と人口移動」中藤康俊編『現代中国の地域構造』有信堂 ８７—１１４頁

田畑久夫・金丸良子（１９８９）『中国雲貴高原の少数民族—ミャオ族・トン族』白帝社

田畑久夫・金丸良子・新免 康・松岡正子・索 文清・C.ダニエルス（２００１）『中国少数民族事典』東京堂出版

玉城 肇（１９５９）『日本における大家族制の研究 —岐阜県白川村の大家族についての社会経済史的研究—』刀江書院

田中長嶺（１９００）『小野宮御偉績考（上）・（中）・（下）』自家版

雲南大学組織編写・主編高 発元（２００１）『雲南民族村寨調査蔵族—中甸尼西郷形朶村』雲南大学出版社

雲南省中甸県地方志編纂委員会纂（１９９７）『中甸県志（中華人

民共和国地方志叢書）』雲南民族出版社
柳田國男（1911）「木地屋物語」『文章世界』6―1
柳田國男（1970）『柳田國男集　第27巻』筑摩書房389―397頁
柳田國男（1925）「史料としての伝説」『史学』4―2
柳田國男（1968）『定本柳田國男集　第4巻』筑摩書房　18―237頁